

伏見康治著作集

報 月
(3)

第 3 卷
1986・12

伏見先生の講義

小 田 稔

遠い南、いわゆる蓬萊の島の台北高校で物理学にあこがれていた高校生の目にも、新興阪大理学部活躍は大へん新鮮なものに映っていた。中でも菊池正士先生を中心とする原子核研究室から聞こえてくるニュースは日本ではじめてのサイクロトロンもかかえていかに華やかだった。折から、食塩から人工放射能をつくるということだったか、ある大学の有名な先生のやや軽率な実験結果がジャーナリズムを騒がせたことについて、東は理研の仁科研究室、西は阪大の菊池研究室が共同戦線をはって、この話を正面か

実験に浅田、奥田、岡部（金治郎）、沢田の諸先生、化学に真島、小竹、赤堀、仁田の諸先生、総長が長岡半太郎、理学部長（？）八木秀次ということだから、当時の阪大理学部がどんな鼻息だったか想像もつこうというものである。そんなところに、南の島からそうとは知らずひたすら菊池先生の書かれた啓蒙書だけから（失礼ながら後でよく見ると大変な名著とは申しかねるのだが）強い影響をうけ、原子核の実験にあこがれてやってきた田舎者は目のくらむ想いをしたものである。

友近先生の力学、永宮先生の物理数学、小林先生の量子力学、東大の小谷先生の群論の集中講義（三日間連続！）等印象に残る名講義の中でも、お若かった伊藤先生（フィジカル・レビューの最近の論文を使つての湯気の出そうな原子核実験学と、これが物理だと思わせる伏見先生のご講義に強烈な印象をうけたものである。その頃のノートや本のほとんどは戦争中に失ってしまったが、今手もとに伏見先生の電磁気学と統計力学のノートの一部が残っている。当時、伏見先生は既に『確率論及統計論』や『ろば電子』等の名著で学生たちにも高名な先生だった。ある意味では洒落であり、また老成した風格（今、計算すると何とお若かったことかと思う）もあり、近づき難い感じももったものである。先生方の間で言われていた「ねこ」というあだ名は少なくとも私どものジェネレーションの学生は使わな

伏見先生の講義……………小 田 稔…1

伏見さんとデモクラシー……………鎮目恭夫…3

伏見先生の恩……………牧野正久…5

みすず書房

東京都文京区
本郷 3-17-15

ら批判された論争を田舎高校生は岩波の『科学』や新聞等で胸をおどらせながら遠くから見たいものである。（昔のことと私の理解も浅く、事実関係に多少違ったところがあるかもしれないが。）

そんなことから原子核の実験をやりたくて阪大へ入ってきたのが昭和十七年四月のことである。大阪にきてみると、菊池先生を中心に伊藤、小林（稔）、武田、伏見、山口（省）、渡瀬の諸先生が並んで、その直前までおられた湯川、武谷、坂田、谷川、中川、熊谷（青木）先生方の神話が先輩から聞けた時代だったのである。

伏見先生はもちろん理論家であられたが、一方実験もやっておられた。入りたての学生にはよくわからなかったが、ウイルソン霧箱を設計されたようにうかがった。菊池研究室というか、菊池グループはまた先に掲げたようにそうそうたる理論の先生方も揃えておられたのである。阪大の物理はこの原子核の研究室の他に、理論に友近、永宮、岡谷、

かったし、その意味もわからなかった。一度うかがいたいと思っている。

先生の電磁気学の講義は衝撃的だった。高校の物理の教科書や、当時の岩波の物理講座で小谷先生、山内先生のご本で数学的な物理（自分の数学がでないこと、また高校生には理解できるはずもなかったことを棚にあげて失礼します）にやや参っていたのが、たとえばDとE、BとHの物理としての基本的な意味を、ボールの本がもとになっていたかと思うが、明快に説いていかれる先生の講義に酔ったようになつたものである。同級のそれぞれ一家言のあった盛田昭夫、金井英三、蜂谷謙一等々もその点同感であつたように覚えてる。もっともそんなことくらいに感心していたのでは先生は大へん不本意なのだろうと思うが。

そんなことから、もともと原子核の実験にあこがれていたのに理論にぐらりとしかけた時期があつた。それには小林先生の前期を実際に役立つ計算に重点を置き、後期にはもっと深い話を入れられた量子力学、ダイナミックな演習を担当された内山先生の個性のせいもあったが。

今思うと冷汗が出るが、お約束もせずに、阪神間の海岸にあったお宅を何度か奇襲（あらかじめお願いしたらお断りにきまっていた）してはお話をうかがい、おまけにもうかなり不自由な時世だったのにご馳走になつたものである。ところが、お話をうかがっているうちに先生が学生の頃に

は講義の間にはノートをとらず、家にお帰りになってから講義の内容を再現してメモをつくられた話等々、人間業とは思われないお話をうかがっているうちに、これはとてもという気になってきた。とどめをさされたのは、正月休みにこれを読みなさいと渡された、ご記憶の方もあろうかと思うが、黄色の固い表紙のフォン・ノイマンのグルンドライゲン・デア・クァンテンメハニク(?)である。まだ一年生だったし、とても歯が立たず、やはり初志貫徹、実験に進もうということにしたのである。あるいは先生は、とても見込みはないよということの間接に伝えようとなさったのかとも思うが、まだうかがえずにいる。

(宇宙科学研究所長)